

『しのびね物語』 注釈(1)

岩 坪 健

「要 旨」 いまだ注釈書が出版されていない『しのびね物語』(中世に改作された擬古物語)の注釈。特に源氏物語の影響を指摘する。

「キーワード」 し の び ね 物 語、源氏物語の影響

凡 例

一、底本は静嘉堂文庫所蔵「しのびね」(松井簡治旧蔵、整理番号五一四―一〇―二二三三〇)を用いた。当写本を選んだ理由は、以下の通り。

1、完本であること。なお当写本は『静嘉堂文庫図書分類目録 続』(昭和十四年刊行)には、誤って「残存本」とある。また当本は「マイクロフィルム版 静嘉堂文庫所蔵 物語文学書集成」の第三編三〇に収められており、その「収録書総目録」(雄松堂、昭和五九年)にも「残存本」とある。

2、いまだ影印も活字もない。当本は大槻修氏・槻の木の会編『校本しのびね物語』(和泉書院、平成元年)にも

未収である。

3、本作品の諸本を桑原博史氏は三系統に分類され、第三系統は室町時代に第二系統から派生した改作本であり、また第二系統の一部の写本には宇津保物語が混入していることを指摘された（同氏著『中世物語の基礎的研究資料と』風間書房、昭和四四年）。そこで、それらの諸本（第二系統の一部と第三系統）は除外した。

以上の条件を満たす写本の中で、注の書き入れがある当写本を選択した次第である。

一、翻刻するにあたり、読解の便宜を図り、次の諸点に手を加えた。

1、小久保崇明・山田裕次氏編『対校「しのびね物語」』（和泉書院、昭和六十年）にならい、作品全体を八十二章に分ち、各章を適宜、段落に分けて通し番号（①以下）を付けた。なお注釈で何章何段落めかを示すときは、章を漢数字、段落を洋数字で表す。例えば第二章の第一段落は「二①」である。

2、句読点を付け濁点を加え、会話・心中語などの部分は「」や『』で括った。

3、仮名遣いを歴史的仮名遣いに統一し、漢字を仮名に直したり、仮名を漢字に改めたりした。なお底本にある振り仮名はそのまま翻刻し、私が付けた読み仮名（その殆どは底本の仮名書きに基づく）は「」の中に入れて区別した。

4、底本の傍注はそのまま本文の右横に翻刻し、頭注は各段落の末尾に付けた注釈の項に回した。

一、注釈では単なる語釈は避け、源氏物語との関係を指摘することに努めた。源氏物語の例文は小学館の日本古典文学全集により、その頁も示した。なお源氏物語本文に主語などを適宜補い、（ ）で括った。また他の物語・日記類も同じ叢書から引き、その頁数を記した。当叢書にない物語（宇津保物語・狭衣物語など）は、岩波書店の日本古典文学大系による。

一、底本の本文が極めて独自である場合に限り、同系統の筑波大学附属図書館蔵本（筑波大学本と略称）の本文を参

考のため注釈に引用した。

一、今回は底本（全七十丁）の第一～十丁を翻刻して、注釈を付けた。

一

その頃、時¹「とき」の有識²「いうそく」と世にののしられ給ふは、内⁴「うち」の大殿「おほいどの」の四位⁵「しる」の少将とかや。まことに光り輝⁶「かかや」き給ふ御さまは、明け暮れ見たてまつる人さへ飽かぬ心地するに、ましてほのかにも見たてまつる人の、あぢきなき思ひの種となるは、ことわりぞかし。殿^{父上}・上^{母上}のかなしとおぼしたる御けしき、いづれの君達よりも、すぐれてかしづききこえ給ふ。御妹¹⁰「いもうと」は東宮¹¹の女御、桐壺¹²にぞおはします。とりどりにいと花やかなる御おぼえ、やむごとなき御さまどもなり。

1 源氏物語で「その頃」で始まる巻は、紅梅・橋姫・宿木・手習のみで、いずれも新しい話を語り始める時に使用。

中世の物語では『石清水物語』『兵部卿物語』等。2 頭注「いうしよく」按源氏さか木巻の巻に時のいうそくと天の

下をなひかし玉へるさまことなめれは同少女巻絵合巻初音巻又うつは俊蔭巻さかの院巻にもみえたりさて語意は形より芸能にいたるまでの事をいへりと花鳥余情にいはれたり。源氏物語では光源氏を「時の有職と天「あめ」の下

「した」をなびかし」（賢木、一三九頁）、夕霧を「天の下並ぶ人なき有職」（乙女、三六頁）「末の世にはあまるまで

天の下の有職」（藤裏葉、四三〇頁）、柏木を「時の有職」（若菜下、二七四頁）と称する。3 「ののしられ給ふ」

は誤用。「この世にののしり給ふ光源氏」（若紫、二八三頁）のように、「ののしる」には評判されるという受身の意

味がある（桑原博史氏「源氏物語と中世物語」、「国文学解釈と鑑賞」昭和五八年七月）。4 まず主人公の親から紹

介するのが、昔物語の冒頭の定型。 5『枕草子』『君達は』の段に「四位の少将」を引く。「少将は相当正五位下な

るに、四位に叙して其まゝあるを叙留といふ。叙留は是殊恩也。近代人ごとに叙留す。又四位の後拜任又常事也。職原にあり」(『春曙抄』)。ただし他の物語の主人公親子は、さらに高い身分官職で始まる(大槻修氏『しのびね物語』

ところどころ)。「甲南国文」35、昭和六三年三月)。 6最高の美しさ。光源氏は「光る君」、桐壺は「かかやく日の

宮」と並び称された(桐壺、一二〇頁)。少将は両人の美を合わせ持つ。 7紫の上も「去年」「こそ」より今年「こ

とし」はまさり、昨日「きのふ」より今日「けふ」は珍しく、常に目馴れぬさまである(若菜上、八二頁)。 8

「光源氏を」おほかたにうち見たてまつる人だに、心とめたてまつらぬはなし」(夕顔、二二二頁)。 9このような

「思ひの種」の使い方は、王朝文学には見当たらないと大槻修氏は指摘された。(『しのびね物語』ところどころ)。「甲

南国文」35、昭和六三年三月)。ただし「もの思ひの種」ならば源氏物語に用例がある。「まいて(浮舟のような)若

き人は、(薫に)心つけたてまつりぬべくはべるめれど、数ならぬ身に、もの思ひの種をやいとど時かせて見はべら

ん」(浮舟の母のセリフ。東屋、五〇頁)。 10光源氏も兄弟の中で、最も父帝に愛された。匂宮(今上帝の第三皇子)

も、両親から格別に愛された。 11「東宮の女御」を、帝との間に東宮を産んだ女御と解釈すると、「若宮も出でき

給はば」(七十四章)と矛盾する。また東宮に嫁いだ女御と見ると、ヒロインに帝の寵愛を奪われ「かく押されぬる

ことと、口惜しく思しわびたり」(同章)と齟齬する。これは散逸した古本『しのびね』(平安後期成立)が改訂され

たとき、現存本が「不用意に踏襲したことに由来する」(神野藤昭夫氏『しのびね物語』の位相)、「国文学研究」65、

昭和五三年六月)。 12桐壺は後宮の中では、帝がいつもいる清涼殿から最も遠いため、光源氏の母、桐壺の更衣の

ように後ろ盾のない人が住む所であった。しかし光源氏がそこを宿直所「とのるどころ」にしたので、娘の明石中宮

は入内して桐壺に住んだ。この東宮の女御は桐壺の更衣のように悲劇のヒロインになるのか、それとも明石中宮のよ

うに栄花を極めるのか、読者の興味を引く名称。 13「御」は帝への敬意。

①神無月ばかりのことなるに、少将殿は嵯峨野¹わたりの紅葉ご覧ありて、小倉の裾など心静かに眺めありき給ふほどに、いとよしある小柴垣²「こしばがき」の内に、耳慣れぬ程の琴「こと」の音「おと」響き合ひて聞こゆ。^{少将ノ詞}『思ひよらぬ琴「こと」の音「ね」かな。いかなる人の弾くらむ』と、隨身⁸「ずいじん」に案内「あない」させ給ふに、^{隨身ノ詞}「御簾「みす」掛け渡して、格子「かうし」二タ間ばかり上げたる内「うち」に侍る」と申せば、何となくおはして、小柴垣¹²「こしばがき」の陰にうち隠れて聞きおはす。

1 嵯峨野は秋の名所。光源氏が造営した六条院で、秋好中宮の庭は「もとの山に、紅葉「もみぢ」の色濃かるべき植木どもをそへて（中略）秋の野を遙かに作りたる（中略）嵯峨の大堰「おほる」のわたりの野山、むとくにけおされたる秋なり」（乙女、七二頁）。 2 住む人のたしなみが、垣根に表れている。北山の尼君の住居も、「同じ小柴なれど、うるはしくしわたして」（若紫、一二七五頁）。 3 源氏物語では北山の僧坊（若紫）、野の宮（賢木、七七頁）、小野の山荘（夕霧、三八六頁）と、いずれも都の郊外に見られ、山里のひなびた素朴さが感じられる垣根。 4 筑波大
学本は「きんのおと」。琴「きん」の琴「こと」は演奏がむずかしくて、紫式部の頃には廃れていた。源氏物語では光源氏が名手で、他には皇族か旧家の人しか弾かない。光源氏が末摘花に心惹かれた契機も、琴「きん」であった。
しのびね物語のヒロインは末摘花のような人なのか、読者の関心も高まる。 5 松風と琴の音が響き合うの意か（桑原博史氏「源氏物語と中世物語」、「国文学解釈と鑑賞」昭和五八年七月）。 6 都以外で琴を聞くのは意外。参考
「思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり」（伊勢物語・初段）。 7 男君が女君の奏で
る音色に魅せられるのは、物語の常套手段。住吉物語や宇津保物語（俊蔭の巻）では、女君の弾く音を男君が聞きつ

けて再会した。 8 貴人はお忍びでも一人歩きはせず、必ず家来を連れる。 9 中古文では「案内させ給ふ」ではなく、「人入れて案内せさす」(若紫、三一〇頁)であり、また「給ふ」の付いた形は源氏物語には見られない(桑原博史氏「源氏物語と中世物語」、『国文学解釈と鑑賞』昭和五八年七月)。 10 片田舎でも気をつけて、外から人に見られないように気を配る、住人の性格がうかがえる。 11 少将はこの時点ではまだ興味本位で、恋心を抱いていない。 12 光源氏は「かの小柴垣のほどに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば」、若紫を見つけた(若紫、二七九頁)。それは三月末、山桜が満開のころ、これは十月、紅葉の時節である。

②日も暮れゆけば、¹弾きさしつ。月やうやうさし出「い」でて、をかしき程に、『何人ならむ。ゆかし』とおぼして、人の見ぬ方「かた」の簀子³「すのこ」に尻「しり」かけて眺める給ふに、⁴おとなしやかなる声にて、「いと艶⁵「えん」なる匂ひかな。いづくより吹きくる風にや」と言へば、少し若き声にて、「姫君⁶の御方に、御火取り召しつるにこそあるらめ」と言ふに、『さればこそ。姫君⁷など言ふは』とおぼして、『見つけられなば頼りにして、言ひも寄らまほし。見あらはさぬ程は、人のかたちも知りたきことぞかし。されども、琴⁹「こと」の音「ね」に通ひたる有様ならば、などておろかならむ。いかにして見るわざしてむ』とおぼして、やをら上「のぼ」りて、立て蔀「じとみ」のもとにたたずみ給へど、格子まゐらする人、¹¹見もつけで入りぬ。

1 源氏物語で、薫が初めて宇治の姫宮を見たとき、姫君たちが有明けの月のもとで合奏していたのとは対照的(橋姫、一三二頁)。 2 琴の演奏は、少将の気を引くほど趣深かった。 3 源氏物語では、ある殿上人が「神無月のころほひ」、紅葉の折に木枯しの女の家を訪れ、「門「かど」近き廊の簀子だつものに尻かけて、とばかり月を見る」(帚木、一五四頁)。 4 「おとなしやか」(落ち着いてしとやかなの意)は王朝文学には見られず、平家物語に用例がある

（大槻修氏『しのびね物語』とどころ、「甲南国文」35、昭和六三年三月）。

5 源氏物語でも、浮舟を垣間見

ている薫君の芳香に気付いた若い女房が、「あなかうばしや。いみじき香「かう」の香「か」こそすれ。尼君のたきたまふにやあらむ」と勘違いした（宿木、四七八頁）。

6 少将と姫君の香りが区別できない女房のセリフ。薫物は

自家製で、香りも十人十色。源氏物語では、浮舟の女房が薫大将と勾宮の香りを識別できなかった結果、浮舟の悲劇が起こった。

7 若い女房の不用意な発言により、姫君の存在が露見。源氏物語でも「夕顔の存在を」いとよく隠したりと思ひて、小さき子どもなどはべるが、言「こと」あやまりしつべきも、言ひ紛らはして」（夕顔、二二五頁）。

8 今までは人目につかないように「人の見ぬ方」にいたが、姫君がいると分かったとたん、女房たちに見つけられたいと願うようになった、少将の気持ちの変化に注目。

9 物語では、楽器の音色で人柄を推察することが多

い。六条院における女楽の場面（若菜下の巻）参照。また薫の音色が実父（柏木）や祖父（頭中将）に似通うように、弾き方も遺伝する（竹河、六五頁。椎本、一六三頁）。

10 いつも部屋奥にいて女房たちに囲まれ、几帳や簾・壁

代などで遮られている女君を見るのは至難の業。

11 この姫君にはまだ男君がいないので、恋人が訪れる夕方になっ

ても、女房たちは外をよく見ないのである。

③大殿油「おほとなぶら」参る気色「けしき」にて、いづくも仮「かり」の住みかと思えて、したたかならず、あさは

かなる住まひなれば、ここかしこ垣間見「かいまみ」歩「あり」き給ふ。隅「すみ」の間「ま」の方「かた」に、

細き隙「ひま」見つけてのぞき給へば、人々集まりて、絵にやあらむ、巻物見るたり。少し奥のかたに添ひ臥したる

人や、もし、姫君といふ人ならむと、目をつけて見給へば、菊のうつろひたる五ばかり、白き袴ぞ見ゆる。髪12のこぼ

れかかりたるは、まづ美しやと、ふと見えたるに、顔13はそばみたれば見えず。

1 参考「かりそめの宿「やどり」」（荒廃した式部卿宮邸。朝顔、四七二頁）。「はかなくもこれを旅寝と思ふかないづくも仮の宿とこそ聞け」（続後拾遺集、卷九、羈旅、五七七、待賢門院堀川）。 2 宇治の山荘も「新しうきよげに造りたれど、さすがに荒々しくて隙ありける」（浮舟、一一一頁）。 3 物語で、男君が女君を見る常套手段。 4 参考「南の隅「すみ」の間「ま」より格子叩き、ののしりて入りぬ」（空蟬一九三頁）。 5 勾宮が浮舟を初めて垣間見たときも、「やをら上」のぼりて、格子の隙「ひま」あるを見つけて寄りたまふ」（浮舟、一一一頁）。 6 勾宮が浮舟をのぞいたとき、女房たちは裁縫をしていた。 7 女性たちの中で姫君と判断したのは、少し奥にいてくつろいでいるから。また女房たちは、主人の前では唐衣と裳を着用するので、姫君と区別できる。 8 頭注「きくのうつろひたる 女宦飾抄曰移菊衣表中紫裏青」。季節に合った装いで、姫君のセンスの良さが窺える。神無月と菊と紅葉の取り合せは、「神無月のつごもりがた、菊の花うつろひ盛りなるに、紅葉「もみぢ」の千種「ちぐさ」に見ゆる折」（伊勢物語、八一段）にも見られる。 9 王朝人は、白菊が寒さで薄紅に変色するのも賞美した。参考「秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば」（古今集、卷五、秋下、二七九、平貞文）。 10 参考「菊の濃く薄き八つばかりに」（更級日記、三三八頁）。 11 頭注「按きくのうつろひたるは姫君の衣にて白き袴は尼上なり」。第六章にも姫君は「赤き袴」、尼上は「白き袴」とある。 12 長い黒髪が、美女の第一条件。 13 浮舟の顔は勾宮が初めて垣間見たときに見えたのに対して、この姫君はすぐには見えず、読者にも気を持たせる設定。

④四十余りなる尼君の、白き衣のなえ²はめる着て、寄り臥して、絵物語見るたり。「目のかすみて、小さき文字は見えぬぞ、いとあはれ。積⁴もる年の徴「しるし」にこそ。火明⁵「あか」くかかげむや」と言ふに、小さき童「わらは」の寄りて、ことごとしくかかげたれば、きらきらと見ゆ。奥⁶なる人、腕⁷「かひな」を枕にしてゐ給へれば、「大殿籠^{侍女ノ詞}」おほとのごも^{忍音}るにや、さらば読みさしてむ」と言ふに、少し起き上がりて、「さもあらず。よく聞き侍るを」とて、

少しほほ笑「⁹ゑ」みたる顔の言はむかたなく美しければ、胸うち騒ぎて、あさましまでまもらるるに、『いかなる人¹¹の、かかる山里には忍びて居たらむ』と、あはれにて出「い」づべき心地もせず。¹³

1 尼削ぎだから一目で尼とわかる。若紫の尼君も「四十余「よ」ばかり」だが、「中の柱に寄りゐて、脇息「けふそく」の上に経を置きて、いと悩ましげに読みたる」（若紫、二八〇頁）。この尼君が経ではなく絵物語を読んでいるのは、源氏物語のパロディ化。 2 源氏物語では、若紫が「白き衣「きぬ」、山吹などの菱「な」えたる着て」いた（若紫、二八〇頁）。 3 「目のかすみで」という言い方は、王朝物語には見当らず、『日泊辞書』などに用例がある（大槻修氏『しのびね物語』ところどころ、「甲南国文」35、昭和六三年三月）。参考「はた目「め」暗「くら」うて経よまず」（紫式部日記、二四六頁）。 4 参考「ゆきつもる年のしるしにとどしく千歳「ちとせ」の松の花さくぞ見る（金葉集二度本、巻五、賀、三三九、宇治前太政大臣）。 5 参考「いにしへは、車もたげよ、火かかげよ、とこそ言ひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよ、と言ふ」（徒然草、一二段） 6 嗜みが深い女房ならば、姫君があからさまに見られないように明るさを抑える。 7 勾宮が浮舟をのぞき見たときも、浮舟の「君は腕「かひな」を枕にて、灯「ひ」をながめたる」（浮舟、一二二頁）。 8 当時の姫君は物語の絵を見ながら、女房などが本文を音読するのを聞いていた。その有様は、国宝源氏物語絵巻・東屋の巻に描かれている。 9 本当はうたたねか考え事をしていたが、朗読者に気を使って嘘「うそ」をつき、照れ隠しで微笑んだ。姫君の心やさしく素直な性格が知られる。 10 光源氏も若紫を初めて見たとき、藤壺に似ているので「まもらるるなりけり」（若紫、二八二頁）。 11 このあたりは、伊勢物語・初段の「この男、かいま見てけり。思はず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり」に似る。 12 頭注「しのひてゐたらん 按るたらんは物すらんの誤なるへし」。 13 光源氏も若紫を見いだして、「あはれなる人を見つるかな」（若紫、二八三頁）と思った。

⑤ 絵、見果てて人々さしのき、又少将ノ袖ノ薫「なほ、めづらしき匂ひのするかな。ここもとに焚「た」き給ふ香「かう」の香「か」には似¹ぎめり」と言へば、御格子まゐらする童、「先「さき」に外「と」へ出でて侍れば、さと、く²ゆりかかる心地し侍る」と言ふに、少将おそろしくて立ち退き給ふ。

1 前の女房は少将の香りを姫君のと勘違いしたが「二②」、これは違いがわかる女房のセリフ。 2 参考「(空蟬の女房は)探り寄りたるにぞ、いみじく匂ひ満ちて、顔にもくゆりかかる心地するに、(相手が光源氏だと)思ひよりぬ」(帚木、一七六頁)。 3 頭注「おそろしくて 按おそろしくての上にさすかなとの詞脱たるか」。少将は光源氏や匂宮と異なり、慎重に行動するタイプ。

三

① つく^{少将ノ心}づくと思ひ続けるに、『かくて日数も経「へ」ば、もしかりそめに物忌¹みなどに簞「こも」りて、立ち帰らむ時、行く方²「へ」も知らずでは、いかがすべからむ』。さらば見³では、えあるまじく、面影恋しかるべければ、そのわたりなる人に尋ねさせ給へば、人ノ答「さしていかなる人とは、詳しく知り侍らず。八月^{ハツキ}ばかりより、忍びておはします。今年「ことし」の内は、かくて過³ごし給ふべきやうに、うけたまはり侍る」と言ふ。

1 頭注「物いみなとにこもりて 按こまれるにてと有しを誤れるなるへし」。姫君の屋敷は都にあり、たまたま外出先の嵯峨野で物忌みにあつたと、少将は考えた。光源氏も夕顔を「いづこをはかりとか我も尋ねん、かりそめの隠れ処「が」とはた見ゆめれば、いづ方「かた」にも、いづ方にも、移ろひゆかむ日を何時「いつ」とも知らじと思す」

(夕顔、二二七頁)。 2 参考「ありと見て手には取られず見ればまた行く方も知らず消えし蜻蛉「かげろふ」」(宇治の姫宮や浮舟を蜻蛉にたとえた薫の歌。蜻蛉、二六四頁)。 3 光源氏も夕顔を「見ではえあるまじく、この人の御心に懸「かか」りたれば」(夕顔、二三六頁)。 4 光源氏も惟光に、夕顔の素性を調べさせたところ、惟光が「隣のこと知りてはべる者呼びて、問はせはべりしかど、はかばかしくも申しはべらず。いと忍びて、五月「さつき」のころほひより、ものしたまふ人なんあるべけれど、その人とは、さらに家の内の人にだに知らせず、となむ申す」と答えたのに似る(夕顔、二二七頁)。

②いかさまにも、ことの気色「けしき」ゆかしければ、また立ち返りて、『誰とか尋ねべからむ』と思ひ煩ひ給ふに、^{侍女ノ詞}「中納言の君や、こちへ参り給ひね」と言ふ声につきて立ち^{少将}寄り給ひて、^{1 光家}隨身して、「ここに人の、月²に引かれてあくがれ侍る。御宿⁴申さむや」と言はせ給ふ。いと^{5 中納言ノ君}思ひかけぬ狩衣「かりぎぬ」姿の男なり。『いかなる人にておはすらむ。このあばら屋には、いかでか明かし給ふべき』と休らふに、君^{少将}、さし寄り給ひて、「いと苦しからぬ者にて侍る。ただ、ここの御簾「みす」の前に、御宿直⁷「とのる」申し侍らむ。夜も更けぬれば、行くほど侍らじ」と、のたまふ御気色、世の常の人とも見えず美しければ、「^{9 中納言ノ君}申し侍らむ」とて入りぬ。

1 相手に直接声をかけず、家来に伝言させるのが貴人のたしなみ。なお傍注の「光家」という名は、物語では第四十
四章に初出。 2 参考「いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ」(夕顔、二三三頁)。 3
「あくがれ侍る」の後に筑波大学本などは「家路も忘れて夜ふけ侍る」の一節あり。参考「この里に旅寝しぬべし桜
花散りの紛ひに家路忘れて」(古今集、卷二、春下、七二、よみ人知らず)。 4 頭注「御やと申さんや 井関隆子云
申さんやにては自他わかたす申させ玉はんや又は申させ玉はなんやなと有へし」(小字の「ん」は後筆。傍線は写本

のまま)。井関隆子（生没一七八五―一八四四年）の実家（庄田家）も嫁ぎ先（井関家）も、代々徳川家に仕えた旗本。特定の師には就かず、真淵・宣長・千蔭などの著書について学ぶ（深沢秋男氏『井関隆子日記』解題。勉誠社、昭和五三年）。 5 参考「内には、思ひも寄らず、狩衣姿なる男」（蓬生、三三六頁。光源氏の命令で、末摘花の邸宅を惟光が訪れたところ）。 6 少将は身分を隠している。光源氏も夕顔を訪れるときは「御装束「さうぞく」をも、やつれたる狩の御衣「ぞ」を奉り、さまを変へ」ていた（夕顔、二二七頁）。 7 光源氏も若紫の邸宅を訪れ、「宿直人「とのるびと」にて侍らむ」と申し出た（若紫、三一八頁）。 8 頭注「いくほと 按いくほともと有へし」。 9 源氏物語で「うつくし」と賞された成人男子は、光源氏・夕霧など数人しかない。

③尼君にしかじかの事、語り聞こゆ。¹「かうばかりつるも、これにやおはすらむ。²このあたり、たたずみありき給ひつらめ。用意なきけはひ聞きやし給ひぬらむ」と、ささめく。「いかで情けなく返し奉らむ」とて、あたりうち払ひ、御褥⁵「しとね」さし出「い」でたり。⁶露もたまらぬ庵「いほり」なれど、『旅はさこそ』と、おぼし許し給へ」とて、いと慣れたる若⁷「わか」う人「びと」出でたり。まづ嬉しく、端⁹「はし」の方「かた」にうち眺めてる給へる御さまの、月の光に輝きて、目¹¹もあやに驚かる。

1 以下の内容は、宇治の姫君たちが合奏をしていたとき、薫に初めて面会を申し出されたときの動揺した気持ちに似る。「かく見えやしぬらんとは思しも寄らで、うちとけたりつる事どもを聞きやしたまひつらむ、といといみじく恥づかし。あやしく、かうばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひがけぬほどなれば、驚かざりける心おそさよ、と心もまどひて恥ぢおはさうず」（橋姫、一三三頁） 2 頭注「このあたりたゝすみ 按このあたりの下にをこそその三字脱たるか」。 3 光源氏が近くに來ていると知らされた尼君も、「いとあやしきさまを、人や見つらむ」と案じた（若紫、二

八三頁)。4 光源氏が急に尼君を見舞いに訪れたときも、「帰し奉らむはかしこしとて、南の廂「ひさし」ひきつくるひて入れ奉る」(若紫、三二〇頁)。5 光源氏が末摘花邸を訪れたときも、「御褥うち置きひきつくるふ」(末摘花、三五五頁)。薫が宇治の姫君を初めて尋ねたときも、「御褥さし出づるさまも、たどたどしげなり」(橋姫、一三三頁)。6 参考「吉野山峰の嵐の激しさにささの庵「いほり」は露もたまらず」(夫木抄、卷三十、雑、一四三六〇、六条院大進)。7 女房の善し悪しは、女主人の評価につながる。最初に男君の接待をする女房が不慣れだと、女君の第一印象が悪くなる。宇治の姫君の「山里びたる若人どもは、さし答「いら」へむ言の葉もおぼえで」とは大違い(橋姫、一三三頁)。8 底本は「わかう人」。「若人「わかうど」と読むか。9 薫が浮舟の隠れ家を訪れたときも、「里びたる簀子の端つ方にゐたまへり」(東屋、八四頁。「国宝源氏物語絵巻」参照)。10 前出「まことに光り輝き給ふ御さま」「一」。11 光源氏も、「(和歌を)のたまふ御もてなし、声「こわ」づかひさへ目もあやなるに」(若紫、二九五頁)、「いと目もあやにこそ清らにものしたまひしか」(若菜上、一九頁)。

④一目「ひとめ」も見知り奉らねども、なつかしげにうち語ひ給ふ。「行く方「へ」もなく迷ひ侍りつるに、うれしき旅寝をもしつるかな。同じくは、導き果て給へかし」とて、少しほほ笑「ゑ」み給へば、「なほ奥へは、おはしますべき所も侍らぬものを」とおぼめけば、「うちつけに思ふこと聞こゆるは、浅きやうなれども、この世ならぬこと¹¹にや。世に立ち舞ふべき心地も、し侍らぬを」とて、

世の常の色¹¹と思ふひまもなく袖の時雨に染むる紅葉「もみぢ」を

とて、散りくる紅葉「もみぢ」を手まさぐりにし給へば、ただかく、

さらぬだに晴れ間「ま」¹⁴ 少なき山里に袖の時雨をなにと添ふらむ

「御心慰み給ふべき紅葉の色も、侍らぬものを」と、おほかたに言ひなせば、「うたても、のたまひなすかな。おぼ

ろけにては尋ね参らぬものを。これも昔の契りと、おぼしなせかし。数ならぬ身なれば、ことわりぞ」と、年月「としつき」おぼしめたるやうに言ひなし給ふ。²²

1 都内に住む女性ならば、有名な少将を何かの機会に見て知っている。知らないのは世間との付き合いがあまりなく、世情にうといから。2 まず女房たちに気に入られるように振る舞うことが必要。そうしないと、女君に言伝を頼んだり手紙を渡してもらえない。薫も「いと細やかになつかしう言ひて、うたて男々」をを「しきけはひなどは見えたまはぬ人なれば、けうとくすすろはしくなどはあらねど」であった（椎本、一八九頁）。3 光源氏が初めて若紫の尼君に贈った歌（「初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞ乾かぬ」）にも、「旅寝」がある（若紫、二九〇頁）。

4 光源氏が初めて若紫の女房に声をかけたときも、「仏の御しるべは、暗きに入りても、さらに違「たが」ふまじかなるものを」と仏教用語を用いた（若紫、二九〇頁）。5 姫君の手引きを頼む、意味深長な表情。6 少将は部屋

の「端の方」に対して奥と言ったが、女房は機転をきかして、わざと嵯峨野の奥にすり替えた。7 相手の本意が

わかっていながら、はぐらかして答えるのは、女房に必要な才覚。こういう優れた女房を持つ女君は、物語のヒロインとして合格。8 光源氏が若紫の女房に初めて頼んだときも、「げに、うちつけなり、とおぼめき給はむもことわりなれど」（若紫、二九〇頁）。また若紫の世話を尼君に初めて申し出たときも、「うちつけに、あさはかなりと御覧

ぜられぬべきついでなれど」と、言い訳した（若紫、二九一頁）。9 現世で起こる事柄は、すべて前世で既に決め

られていると考えられていた。光源氏が若紫を所望したときも、「いかなる契りにか、見たてまつりそめしより、あはれに思ひきこゆるも、あやしきまで、この世の事にはおぼえ侍らぬ」と言った（若紫、三二二頁）。10 恋死「こ

いじに」しそудと訴えるのは常套手段。柏木も女三の宮への愛執を自省して、「つひに、なほ世に立ちまふべくもおぼえぬもの思ひの一方「ひとかた」ならず身に添ひにたるは、我より外「ほか」に誰かはつらき」（柏木、二八〇

頁)。 11 参考「世のつねに思ひやすらむ露ふかき道のささ原分けて来つるも」(匂宮が中の君に送った後朝の和歌。総角、二六〇頁)。表現が類似した歌では、「世のつねの色とも見えず雲るまで立ち登りたる藤波の花」(宿木、四七二頁)、「世のつねの紅葉とや見るいにしへのためにしに引ける庭の錦を」(藤裏葉、四五三頁)。 12 「袖の時雨」は勅撰集に十数首あり。時雨に涙を暗示する。紅涙の意も含むか。参考「九月にもなりぬ。野山のけしき、まして袖の時雨を催しがちに」(椎本、一八三頁)。 13 和歌の世界では、時雨が木々を紅葉させる。参考「白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり」(古今集、卷五、秋下、一六〇、紀貫之)。 14 手にした物に思いを寄せて歌を詠むのは、よくある粹な行為。 15 返歌する際、相手の歌と同じ言葉を使うのが常套手段。ただし返歌の方には女君の涙も含ませて、男君に見捨てられ悲恋に終わるといふ、おきまりの詠み方。 16 贈歌にも見られる言葉だが、裏の意味は男君の思いから女君の容姿にすり替えている。 17 贈歌の意図に気づかないふりをするのが、女房の心得。 18 訪問こそ愛情の印、という訴え方はよくある。「うちつけに浅き心ばかりにては、かくも尋ね参るまじき山のかけ路」(ち)に思ふたまふるを」(宇治の大君に対する薫のセリフ。橋姫、一三四頁)。 19 二人は赤い糸で結ばれている、と思ひこみなさいと説得する。恋愛も前世からの定めと考えられていた。「おぼえなきさまなるしもこそ、契りあるとは思ひたまはめ」(空蟬に初めて会った時の光源氏のセリフ。帚木、一七八頁)。 20 断られるのは自分のせいだと言つて、実は冷淡な相手を恨むのも、口説き方の一つ。「数ならぬ身を見まうく思し棄「す」てむもことわりなれど」(伊勢に下向する六条御息所に対する光源氏の言葉。葵、二五五頁)。「数ならずとも、御耳馴れぬる年月も重なりぬらむ」(夕霧が落葉の宮に訴えたセリフ。夕霧、三九三頁)。 21 光源氏も初対面の空蟬に、「うちつけに、深からぬ心のほどと見たまふらん、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心の中「うち」も聞こえ知らせむとてなん」(帚木、一七五頁)。また偶然契りを結んだ軒端萩に向かつて、「たびたびの御方違へにことつけたまひしさまを、いとう言ひなしたまふ」(空蟬、二〇〇頁)。 22 口説き上手なプレイボーイの面目躍如。このあたりは「おほかたに言ひなせ

ば」「のたまひなすかな」「おぼしなせかし」「言ひなし給ふ」と、「なす」がよく使われ、恋の駆け引き場面。

⑤昨日「きのふ」、今日「けふ」見初「そ」めて、のたまふやうにもなければ、『いかにして、かかる人おはしますと聞き給ひけむ』とおぼつかなし。まめやかに責め給へば、²尼上は、『いと思ひかけぬ事にもあるかな。さて誰「たれ」³とも知らぬ人に、とかくいらへ聞こえむにもあらず。なべてならぬ御様は、⁴夜目「よめ」にもしるければ、⁵このごろ世にめでの⁶のしられ給ふ大殿「おほいどの」の四位の少将殿にや、おはすらむ。さては、⁷かばかりのかたちし給へる人は、おぼえざめり。とまれかくまれ、かく数ならぬ身を、ときめき給ふ人の¹⁰見過ぐし給ふべきにもあらず。ものは¹¹かなき御さまにて、¹²人におとしめられ給はむも、いといとほしきことにもあるべきかな』など、おぼし煩ふ。

1 姫君一行は嵯峨野に二カ月前に「忍びて」来た「本章①」。光源氏が若紫の件を初めて言い出したときも、尼君は「かの若草を、いかで聞い給へることぞ」と不審がった（若紫、二九一頁）。2 今までは「尼君」だったが「三④、三③」、「尼上」の方が姫君の保護者としての重要な地位が読者に伝わる。なお少将のセリフの中では「尼上」「本章⑥、六」、姫君のセリフでは「尼君」「五③」と使い分けられているが、地の文では「尼君」「本章⑦、五④、七②」と「尼上」「五①、七②」が混在する。3 少将はまだ自己紹介をしていない。よって正式なプロポーズではないので、以下、姫君は妾扱いかという悩みが述べられる。4 服装や言葉遣い、しぐさや家来の様子などから、身分が知られる。5 参考「カンのおとゞ」「夜目「よめ」」にも著「しる」くぞ』と聞「きこ」え給へば」（宇津保物語・蔵開上、二六五頁）。6 第一章の3「ののしられ給ふ」項、参照。7 頭注「さては 按さらてはと有し成へし」。8 光源氏も同様に賞された。「(北山の) 年老いたる尼君たちなど、まださらにかかる人の御ありさまを見ざりつれば、『この世のものともおぼえたまはず』と聞こえあへり」（若紫、二九八頁）。9 尼君の悩みは、薫に言い寄られた娘

(浮舟)の将来を案じる母(中将の君)と共通する。「(薫が浮舟に)まめやかに御心とまるべき事とも思はねば、(中略)人の御ほどのただ今世にあり難「がた」げなるをも、数ならましかばなどぞ、よろづに思ひける」(東屋、一一頁)。
10 末長く世話をして、連れ添って一生を過ごす、という意味。
11 少将がやがて名門の女性と結婚する将来のことまで、尼君は思案する。身分違いの不釣り合いな結婚は、結局、不幸をもたらす。
12 尼君は姫君を、日陰者にはしたくない。浮舟の母も浮舟の婿には、「二心「ふたごころ」なからん人のみこそ、めやすく頼もしきことにはあらめ」と考えた(東屋、三〇頁)。

⑥またうち返し、『宿世「すくせ」は何にもよらぬことなれば、かくてつくづくとおはしまさむを、見たてまつる我さへ悲しければ、とにもかくにも、かひある御さまを見置きて、いかにもならばやとこそ思へ。いかなるべきにかあらむ。何さまにも御いらへなからむは、便「びん」なかるべし』とて、⁵尼上ヨリノ答「かく仰せらるべき人も侍らぬを、『もし所違「ところたが」へにや侍らむ』と、たどられ侍る」とあれば、⁷少将ノ詞「なほざりに思ひて、うち出「い」づべきことにも侍らず。かく仰せらるるなむ、⁸なかなか浅くおぼえ侍る」と、いとねんごろに聞こえ給へば、⁹尼君言ふべき言の葉もなく、¹⁰いかにも、ただ今は思ひわき侍らず。かく数ならぬ身ひとつをうち頼む人なむ侍れども、さやうに御覧じ入「い」るべき様「さま」にも侍らず。この二月「ふたつき」ばかり物の怪「け」に煩ふこと侍りて、いとど心の闇にさへ見¹¹苦しく侍るを、¹⁴今ちと思ひ沈めて、ともかくも聞こえさせむ」とのみいらへ給へば、¹⁵いと心憂くも、おぼめかしのたまひなすかな。ほのかに見たてまつりし夕べより¹⁶静心「しづごころ」なきを、¹⁷忍音ノコト也まづ自「みづか」らの御言「こと」こそ難「かた」からめ。いとなめげなれども、¹⁸人づてには御心遣「づか」ひも¹⁹苦しからむ。尼上に、ただ暗き程の紛れに²⁰対面賜「たまは」らむ」と、切「せち」に逃「のが」るべくもあらず聞こえまはし給へば、さのみ否「いな」み給はむも、²¹人柄便「びん」なければ、²²なよろかなる衣「きぬ」ひき着て、²³障子細目「ほそめ」に開けてゐざり出

で給ふ。

1 参考「宿世など言ふめるもの、さらに心になはぬ物に侍るめれば」(総角、二五五頁)。「宿世など言ふらむものは目に見えぬわざにて、親の心にまかせ難し」(若菜下、二五四頁)。2 浮舟の母も玉の輿を願ひ、「わが娘も、かやうにて(貴人に)さし並べたらむにはかたはならじかし、(中略)なほ今より後「のち」も心は高くつかふべかり」と思案した(東屋、三八頁)。3 尼君は姫君の幸福な結婚生活を見届けた後、身を引くつもりである。若紫の尼君も、「(幼い若紫を)いみじう心細げに見たまへおくん、願ひ侍る道のほだしに、思ひたまへられぬべき」と言つて、光源氏に託した(若紫、三二頁)。4 貴人に返事をしないのは失礼。5 返歌した女房も、「御心慰み給ふべき紅葉の色も、侍らぬものを」と答えた「本章④」。光源氏が若紫に初めて歌を送ったときも、女房は「さらにかやうの御消息「せうそこ」うけたまはり分くべき人もものしたまはぬ」と答えた(若紫、一九〇頁)。6 浮舟も薫からの手紙を、「所違へ」だと言ひ逃れて突き返した(浮舟、一六九頁。夢浮橋、三七九頁)。もし求婚に同意しても、一度は婉曲に断るのが礼儀。7 以前のセリフ「うちつけに思ふこと聞こゆるは、浅きやうなれども」「本章④」よりも、断言した言ひ方に変化。ただし尼君に直接話すときは、「うち出「い」づる程は浅き様「やう」に侍れども」と前の言ひ方に戻る「本章⑦」。8 女性側を非難して困らせるのも、恋愛戦術の一つ。9 口では尼君よりも、世馴れた若い少将の方が上手。10 光源氏に若紫を所望されて、尼君が断ったセリフに似る。「あやしき身ひとつを、頼もし人にする人なむ侍れど、いとまだ言ふかひなきほどにて、御覧じ許さるる方も侍りがたげなれば、えなむ承「うけたまは」り留「とど」められざりける」(若紫、二九二頁)。11 若紫は幼稚さを理由に断ったが、しのびねの姫君はもう大人なので、仮病を口実にした。12 「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰集、卷十五、雜一、一一〇二、藤原兼輔)。光源氏も夕霧を見て、「中将の朝明「あさけ」の姿はきよげなりな。た

だ今はきびはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや」と言った(野分、二六七頁)。13ただし源氏物語では、やつれの美もある。紫の上は病死する直前、「こよなう痩せ細りたまへれど、かくてこそ、あてになめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれ」(御法、四九〇頁)。14頭注「いまちと 按此ちとゝいふはすこしなといはん意なるへしすゑにもあまたみゆ」。「ちと」は平安文学には見当らず、中世語か(桑原博史氏『中世物語の基礎的研究』資料と史的考察、風間書房、昭和四四年。大槻修氏『しのびね物語』ところどころ、「甲南国文」35、昭和六三年三月)。15姫君の病気を否定するため、本人を垣間見たことを白状する。また姫君の噂だけ聞いて恋しているのではない誠実さを示す。なお光源氏は、若紫を垣間見たことを尼君に打ち明けていない。16参考「その夕べより乱り心地かきくらし」(女三宮を見た柏木の手紙。若菜上、一四〇頁)。17男君が女君と直接話すのは、仲が深まってからのこと。18今までの尼君とのやり取りは、女房を介して行われた。19自分は、人づての扱いを受けるような下衆「げす」ではないと主張する。このあたり、光源氏が初めて若紫の尼君と、直接話したいと頼んだ箇所(若紫、二九二頁)に似る。「かうやうの伝「つて」なる御消息は、まださらに聞こえ知らず、ならはぬことになむ」(若紫、二九二頁)。20若紫の尼君も光源氏に対面をせがまれて、「まめやかにのたまふ、かたじけなし」と判断して応じた。(若紫、二九二頁)。21家にいるときは、真新しい衣よりも着馴れて柔らかい方が好まれた。「白き御衣「ぞ」どものなよやかなるに」(雨夜の品定めにおける光源氏の服装。帚木、一三七頁)。22恋人通しではないので鍵を掛けないが、末摘花が光源氏に会ったときは、「二間「ふたま」の際「きは」なる障子、手づからいと強く鎖して」(末摘花、三五五頁)、宇治の大君も「廂の障子をいとよく鎖「さ」して、(薫に)対面したまへり」(総角、二五三頁)。23平安女性性は膝行した。しかしこの風習も鎌倉時代になると、「むかし女房のやうにゐざりありきしも、をかし」のように古風になる(『弁内侍日記』寛元四年十一月二十二日)。

⑦^{少将}少し居直り給ひて、「うち出²「い」づる程は浅き様「やう」に侍れども、心の底の深さをかごとにてなむ尋ね参りぬるを、ただうちつけの好き心とおぼしめしなすなむ嘆かしく侍る」と、いとらうたげなる御声にて、さすがに恥ぢらひてのたまへば、御いらへ聞こえにくけれど、「かくおぼしより給ふも、この世ならぬことは思ひ給ひながら、人にも似ぬ身の程をばかり侍る」など言ひ交はし給ふほどに、やうやう月も傾「かたぶ」き、明け方近くなるに、殿より御迎への者ども参りつどひて、昨夜「よべ」より尋ね奉りたるよし申して、女御殿も昨日「きのふ」まかで給へるに、とくとく帰りおはすべきよしなど、さまざまにことごとしげに申しなすに、尼君、「さればこそ、大殿「おほいどの」の御子におはすれ」と知り果てぬ。¹²

1 相手が女房か尼君かで、少将の態度も異なる。「御息所るざり出でたまふけはひすれば、(夕霧は)やをらるなほりたまひぬ」(柏木、三三八頁)。2 少将が女房に声を掛けたときの出だしも、「うちつけに思ふこと聞こゆるは、浅きやうなれども」(本章④の8)。3 「らうたげ」は源氏物語では殆ど女性に用いられ、男性は五例しかなく全て未成年者(少年か幼児)に使用。4 青年らしい一途さと恥じらいが感じられる。5 少将も「この世ならぬことにや」と言った「本章④の9」。6 「給へ」とする伝本もある。7 類例「数ならぬ身」(本章⑤、尼君の心中)。8 光源氏が北山に出かけた翌朝も、「御迎への人々参りて(中略)内裏「うち」よりも御とぶらひあり」(若紫、二九四頁)。9 貴人の周囲にはいつも女房や家来が控えていて、一晩でも無断外出すると大騒ぎになる。光源氏も夕顔の宿に泊まった翌日、「内裏「うち」(父帝)にいかにも求めさせたまふらんを、いづこにも尋ねらん」と氣遣った(夕顔、二三七頁)。10 東宮の女御、少将の妹「二①」。11 浮舟に近付いた匂宮を引き離すときも、母后の病を「御使の申すよりも、いま少しあわたたしげに申しなせば」(東屋、五九頁)。12 頭注「しりはてぬ 按地の詞なればしりはて給ひぬと有しなるへし」。

⑧母上^{1少将}の御消息もありなどすれば、わづらはしくて、「さは、²この紅葉「もみぢ」の折、過ごさず必ず参り来む。とかくさし放たせ給ふ御気色「けしき」の、いと本意「ほい」なくなむ。数ならずとも、今は常にこそ参らまほしけれ」とて、なほ出でやり給はねば、御車、廊に寄せて声作^{5少将ノ從者}「こわづく」りるたるに、あわたたしくて出で給ふ。

1 勾宮が宇治に忍び歩きた折も、母后の命令で殿上人が大勢迎えに来た（総角、二八四頁）。 2 光源氏も北山を立ち去る時、「いまこの花のをり過ぐさず参り来む」と僧都に言った（若紫、二九五頁）。 3 光源氏も北山を去った翌日、尼君宛の手紙に「もて離れたりし御気色のつましさに」と記した（若紫、三〇二頁）。 4 前出「数ならぬ身」「本章④の20」。 5 光源氏がひそかに朧月夜を訪れた翌朝も、「廊の戸に御車さし寄せたる人々も、忍びて声作りきこゆ」（若菜上、七六頁）。勾宮が宇治の中の君に会いに行った翌朝も、「人々いたく声作り、もよほしきこゆれば」（総角、二七四頁）。

⑨京におはし着きたれば、殿・上など、久しく^{1少将}こもりおはしつるに、珍しくおぼしたる様「さま」のあはれにおぼえ給ふ。女御殿の御前に参り給ひければ、いと勾ひやかに³気高きものから愛敬「あいぎやう」こぼれて、さらに⁴ただ今の世にはありがたく見え給ふにも、『かのほのかなりし火影は、劣るまじく見えし』と、心にかかりて恋しくおぼえ給ふ。

1 少将に一晩会わないだけで「久しく」「めづらしく」思うほどの溺愛ぶり。あるいは娘の女御が、宮中に「久しくこもり」の意か。 2 これほど息子を気遣ってくれる両親に内緒で外出したので、自責の念に駆られ、親の愛情が普段よりも身にしむ。 3 宇治の大君も「限りなくあてに気高きものから、なつかしうなよやかに、かたはなるまで、

なよなよとたわみたるさまのしたまへりしにこそ」(東屋、六七頁)。この一節の描写は、匂宮とその姉宮(女一の宮)、宇治の中の君の關係に似る。「(女一の宮の)限りもなくあてに氣高きものから、なよびかにをかしき御けはひを、(匂宮は)年ごろ二つなきものに思ひきこえたまひて、またこの御ありさまになずらふ人世にありなむや、(中略)(中の君は)らうたげにあてなる方の劣りきこゆまじきぞかしなど、まづ思ひ出づるにいとど恋しくて」(総角、二九三頁)。⁴ 参考「(匂宮は)当時「たうじ」の帝・后のさばかりかしづきたてまつりたまふ親王「みこ」、顔容貌「かたち」よりはじめて、ただ今の世にはたぐひおはせざめり」(蜻蛉、二二二頁)。⁵ 姫君の姿「二④」が強烈に焼き付いている。⁶ 匂宮も浮舟と初めて契った後、朝帰りして中の君に会い、二人を比較している。「めづらしくをかし、と見たまひし人(浮舟)よりも、また、これ(中の君)はなほあり難きさまはしたまへりかし」(浮舟、一二八頁)。

四

その後「のち」も、度々「たびたび」ねんごろに御消息「せうそこ」聞こえ給ふに、母君¹もおぼし煩ひて、『かく、ものはかなき御様をなかなかには思へど、行末「ゆくすゑ」のことは御宿世³に従ふことなれば、かくてつくづくとおはしまさむに、明日⁴「あす」をも知らぬ命のはかなきに、むなくもなりなば、いかなるあやし⁵の者か馴れ^{忍音上二}寄り奉らむ。しばし⁶にても、かかる人にこそさし並べて見たてまつりたけれ』とおぼし弱りて、はしたなき御返しもし給はず。

1 今までは「尼君」「尼上」と呼ばれていたが、ここで初めて姫君の母であることが明かされる。また母の立場や役

割を強調した呼称。 2 以下の悩みは、前の描写「三⑤⑥」に似る。 3 参考「宿世といふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば」(総角、一三六頁)。 4 若紫の尼君も自ら「おのがかく今日「けふ」明日「あす」におぼゆる命」と言った(若紫、二八一頁)。 5 宇治の八の宮も同じことを心配して、姫君たちに「おぼろけのよすがならで、人の言「こと」にうちなびき、この山里をあくがれたまふな」と訓戒した(椎本、一七六頁)。当時、「ほどほどにつけて、思ふ人以後「おく」れたまひぬる人は、高きも下「くだ」れるも、心の外「ほか」に、あるまじきさまにさすらふたぐひだにこそ多くはべるめれ。それみな例のことなめれば」であった(総角、二四〇頁)。 6 浮舟の母も薫を見て、「この御ありさまを見るには、天「あま」の川を渡りても、かかる彦星「ひこぼし」の光をこそ待ちつけさせめ」と願った(東屋、四八頁)。

五

①さて、三十日「みそか」¹わたり²に、いと心^{少将}ことに薫り満ちて、うち化粧「けさう」じておはしたり。かくと御消息あるに、御心設「まう」^{尼上ノ方ニ}けし給へることなれば、驚き顔にもあらず入れ奉る。尼上出で給ひて、「かばかり御心を、とどめ給ふべき人にもおはせず。いと、ものはかなき様「さま」⁵を御覧じがたうこそ侍らめと、思ひ給ひながら、さのみ、とかくためらひ侍らむも、いと便「びん」なき事と思ひ給へ憚りてなむ」とのたまふ様「さま」⁷の、気高くうち勾ひたる様、いみじう見ゆるに、『いかに^{少将ノ心}も、ただ人にはあらじ』と、おぼしたり。

1 太陰暦では大の月は三十日、小の月は二十九日。 2 頭注「三十日わたり 按わたりははかりの誤なるへし」。 3 勾宮が六の君と結婚したときも、「いかでめでたきさまに待ち思はれん、と心げさうして、えならず薫きしめ給へ

る御けはひ言はん方なし」であつた（宿木、三九四頁）。また光源氏も朝顔の姫君を訪れるとき、「なつかしきほどに馴れたる御衣「ぞ」どもを、いよいよたきしめ給ひて、心ことに化粧「けさう」じ暮らし給へれば」と、念入りに準備をした（朝顔、四六九頁）。4前出「かく仰せらるべき人も侍らぬ」「三⑥の5」。5前出「ものはかなき御様」〔四〕。6筑波大学本は「思ひ給へなから」。7もし母親が下品ならば、姫君に傷がつく。光源氏が明石の尼君と対話したときも、尼君の話しぶりを「けはひよしなからねば」と思い、和歌を「わざとはなくて言ひ消つさま、みやびかによしと聞き給ふ」（松風、四〇二頁）。

②夜うちふくるままに、御格子引き上げて、入り給へるに、紅梅^{2忍音上}の七ばかりに、青き単衣「ひとへ」、唐綾「からあや」の小桂「こうちぎ」着給へる様、よそにて仄かに見しよりも、近³まさりはたとへむ方なし。とかく、もののたまふに、あさましく恥づかしげなる様の、言ひ知らずらうたくて、『かかる人^{4少将心}を知らずして外様「ほかさま」にもなりなば、口惜しかるべきこと』と、おぼさる。御志^{5草子地}「こころざし」の浅からぬも、行く末あぢきなきことなりかし。

1この格子は上下二枚に分かれるのではなく、一枚戸形式。2頭注「こうばい 紅梅衣 面紅梅或紅裏紅或蘇芳或紫自十一月至二月祝時用之由見諸抄」。今は十月末だが十一月に準じて、また祝い事なので着用。3宇治の中の君も「容貌「かたち」よりはじめて、多く近まさりしたり」と、匂宮は思った（総角、二七〇頁）。4薫も宇治の姫君の将来を考えて、「宿世ことにて、外さまにもなりたまはむは、さすがに口惜しかるべう、領「りやう」じたる心地しけり」（椎本、一七五頁）。5この結婚は少将の両親が関知していないので、少将の愛情が深ければ深いほど、将来の悲劇は深刻になる。

③夜明けて御格子など参るに、日のけざやかにさしいでたれば、御簾「みす」・几帳引き上げて見給ふに、今朝はまだつくろひ給はぬ程の御顔のうち赤み給へるは、さらにこの世のものとも見えず。髪、丈「たけ」に少しあまりて、髪「かん」ざし・額「ひたひ」つきの貴「あて」に美しさは、女御の君にもなほたちまさりてやとおぼすも、わが志「こころざし」の浅からぬ見なしにやと、人にも見せまほしく、つくづくと見るに、なほ類「たぐひ」あらじと思へば、そばみ給へるを引き向けて、「など、かく憎しとおぼすらむ。まろは少しの隔ても、今よりはもの憂かるべきを、近き所へ渡し奉らむ」と、いとなつかしくのたまへば、「尼君には、いかでか離るべき」と、いと幼げにのたまへる様「さま」、若う美しければ、うち笑ひて、「いと幼くこそおはしけれ。それも御身に添ひてこそ、おはせめ。頼りなくては、いかが」とのたまへば、『ただ、かくてこそ』とおぼしたる気色「けしき」の、らうらうじくなつかしければ、その日も立ち返り給はず。

1簾を引き上げるのは女房などの仕事で、ふつう貴人はしないが、この場合は二人きりのまま早く女君を見たいから。光源氏も夕顔を廃院に伴った翌朝、「日たくるほどに起きたまひて、格子手づから上げたまふ」（夕顔、二三五頁）。2正式な結婚ならば、新婦を日の光で見られるのは三日めの朝。3化粧していない顔を見られて恥じらい赤面。参考「女は寝起き顔なむ、いと良き」（能因本枕草子「職の御曹司の西面の」。三卷本は傍線部が「かたき」。「殿おはしませば、寝くたれの朝顔も時ならずや御覽ぜむと、引き入る」（枕草子、「関白殿、二月二十一日に」）。4背丈より少し長いのが理想的。たとえば女三の宮は「七八寸ばかりぞ余りたまへる」（若菜上、一三三頁）。5若紫も「いはけなくかいやりたる額つき・髪ざし、いみじうつくし」（若紫、二八二頁）。6女御との比較は前出「三〇」。匂宮も宇治の中の君を三日めの朝見て、姉宮と比較して、「女君（中の君）の御容貌「かたち」のまほにうつくしげにて、限りなくいつきすゑたらむ姫宮（姉宮）もかばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、わが方さま（姉宮）

のいといつくしきぞかし」(総角、二七二頁)。7 いわゆる「あばたも、えくば」の類。光源氏も夕顔への「御心ざし一つの浅からぬに、よろづの罪、許さるるなめりかし」(夕顔、一三二頁)。8 参考「(光源氏が太っても貫禄がついたと思われるのは、明石の君の)あながちなる見なしなるべき」(松風、四〇七頁)。9 女性は成人すると、家族や夫・恋人以外には顔を見せないのが普通。惟光は幼い息子にさえ、娘に近寄ることを厳禁した(少女、五九頁)。10 頭注「つく／＼とみるになほたくひあらしとおもへは 按少将の心のうちを地よりいへるなれはつく／＼と見玉ふに云々おもひ玉へはと有へし」。11 姫君が恥じらって横を向いているのを、少将は自分を嫌ってそっぽを向いていると、冗談で言った。12 心の隔たりと、離れて暮らすことの意を掛ける。13 頭注「ものうかるへきを 按ものうきといへる詞をたゞうき事に転しいへり」。14 少将の両親はこの結婚をまだ知らず認めていないので、親の家には姫君を連れて行かれない。薫も宇治にいた浮舟を、三条宮(薫の住居)の近くに移そうとした(浮舟、一三五頁)。15 広島平安文学研究会「訳注『しのびね物語』(上)」(「古代中世国文学」4、昭和五九年八月)では、「そんなにあなたが頼りないんだから、一人にしてはおけません」と訳す(8頁)。私案は「頼りになる人(尼君)がいなくては、あなたはどうしますか(困るでしょう)」。後出「知らぬ所、頼りなくおはせむ」[七②]参照。16 広島平安文学研究会の訳では「ただこのままで居たい」。私案は「ただ少将が言う通りにしよう」。17 正式な結婚ならば最初の三日間は、まだ暗い時分に帰らなければならない。勾宮も宇治にいた浮舟と初めて契った翌朝、「出で給はん心地もなく、飽かずあはれなるに、またおはしまさむことも難「かた」ければ」と思い、帰京しなかった(浮舟、一一八頁)。

④¹いと遠き道のほどをしも、通ひ歩「あり」き給ふべき事の、所せき御身には、いと大事「だいじ」²なるべきとおぼして、渡し奉らむことをたまふ。また御迎への者、参りぬ。さまざまと語らひおきて出で給ふ。「この程、日次」³「ひついで」など見せて、御迎へ参らせむ」と、尼君にも細々「こまごま」⁴とのたまひ置きて出で給ふ。

1 匂宮も宇治にいる中の君と結婚した明朝、「道のほども、帰るさはいと遙けく思されて、心やすくもえ行き通はざらむことの、かねていと苦しきを」と悩んだ（総角、二五八頁）。 2 薫も宇治にいる浮舟を思いやりながら、「所せき身のほどを、さるべきついでなくて、かやすく通ひ給ふべき道ならねば」、なかなか行けなかった（浮舟、九八頁）。 3 頭注「いとだいし成へき 按成へしの誤也」。 4 前出「本章③の14」。光源氏も明石から大堰「おほる」川のほとりに引越した明石の君に向かって、「ここにも、いと里離「ばな」れて、渡らむことも難きを、なほかの本意ある所（二条の東院）に移ろひ給へ」と勧めた（松風、四〇〇頁）。また匂宮も、宇治の中の君と結婚して三日めに、「常にかくは、えまどひ歩「あり」かじ。さるべきさまにて、近く渡し奉らむ」と、新妻に語った（総角、二七一頁）。 5 「参りぬ」の箇所、筑波大学本は「まいらぬおりとおほして」。 6 当時は爪切りのような些細なことまで、すべて暦の吉凶に従った。たとえば『九条殿遺誠』参照。

⑤ 殿^{父上}へおはしたるに、「など、かく遙かなる道のほど、軽々¹「かるがる」しく通ひ歩「あり」き給ふらむ」とむつかり給へば、『さればよ』と今²よりさへ心苦しくおぼして、かしこまりて立ち給ふ。若き女房などは、「いかなる御事に静⁴「しづ」心なく、あくがれ歩「あり」き給ふらむ」など、ゆかしがり聞こゆれば、「世^{少将ノ詞}の常ならぬ紅葉に引かれて」とて、うちほほゑみ給へるに、愛敬⁵「あいぎやう」はこぼるばかりにて、匂⁶ひを散らし給へるさまの、げ^{草子ノ地}に好き給はざらむも、さうざうしからむと見えたり。

1 匂宮の宇治通いについても、「軽々「かるがる」しき御ありさまと、世人「よひと」も下「した」に誹「そし」り申すなり」（総角、二九二頁）、また「人に知られさせたまはぬ御歩「あり」きは、いと軽々「かるがる」しく」と言われた（浮舟、一二五頁）。 2 頭注「今よりさへ 按こゝのさへは衍文なるへし」。 3 父親には楯突かず、小言を

聞き終わってから席を立つ、少将の従順な態度。 4 源氏物語では、夕顔の元に通う光源氏を見て、女房たちが、「見苦しきわざかな。このごろ例よりも静心なき御忍び歩きのしきる中にも」と嘆き合った（夕顔、二五五頁）。 5 光源氏も「御指貫「さしぬき」の裾「すそ」まで、なまめかしう愛敬のこぼれ出づる」（松風、四〇六頁）。 6 夕霧も「あざやかにもの清げに若う盛りに匂ひを散らしたまへり」（夕霧、四五七頁）。 7 色好みは、物語で男主人公になる条件の一つ。「（もし光源氏が）好き給はざらんも情けなく、さうざうしかるべしかし」と、惟光は思った（夕顔、二一七頁）。また宮中でも、光源氏が「情けなからぬほどにうち答「いら」へて、まことには乱れ給はぬを、まめやかにさうざうと思ひきこゆる」女房もいた（紅葉賀、四〇七頁）。薫は「世の常のすきずきしさも見えず、いといたう静まりたるをぞ、ここかしこの若き人ども、口惜しうさうざうしきことに思ひて、言ひ悩ましける」（竹河、五八頁）。

六

さて、御乳母¹「めのと」に、「大方「おほかた」ならずとも、女の装束「しやうぞく」一下「ひとくだ」り」とのたまへば、承りて、紅葉襲²「かさね」十ばかりに赤き袴・濃き紅「くれなる」の単「ひとへ」・御小桂「こうちぎ」など、いと美しくして奉る。「尼上の御装束も」³とのたまへば、梔子³「くちなし」・縹³「はなだ」など、白き袴に添へて奉るに、霜月二、三日の頃、良き日見せて、御乳母子⁴「めのとご」の左中弁なる家にのたまひ仰せて、とり計らひ、しつらひて、御簾⁷「みす」・几帳⁷「きちやう」・屏風・褥⁷「しとね」などやうの物ども、こしらへて運ばるるに、御達⁸「ごたち」なども、『さばかりにあるべし』と心得て、「おぼろけの人にはあらじ。誰ばかりにかあらむ。左大将⁹の姫君を、殿の御気色「けしき」賜「たまは」らせ給ふに、煩「わづら」はしきことやあらむ」と、下にわぶめり。

1 光源氏も玉鬘を引き取る前に、「御装束、人々の料「れう」などさまざま」贈った（玉鬘、一一七頁）。薫も宇治の姫君たちのために、「さまざまなる女房の装束、御乳母などにもものたまひつつ、わざともせさせ給ひけり」（総角、二八一頁）。一方、何一つ不自由のない生活しか知らない匂宮は、このような「こまかなる内々のことまでは」（宿木、四二九頁）気がつかないのに対して、薫は八の宮家の零落ぶりを見て以来、「なべての世をも思ひめぐらし、深き情けをも習ひ給ひにける」（宿木、四三〇頁）。2 季節に合った衣装。頭注「紅葉かさね十はかり 仮字装束抄云もちりもみち あをきこきうすき一きなるやまふきくれなる裏はすはうくれなる山吹ききうすきくれなるのひとへ 女官飾抄云紅葉重八黄三山吹薄濃一重紅薄濃一重蘇芳一 按十はかりは大かたの数をいへるのみにてかならず十と限りたるにはあらず」。3 光源氏も出家した空蟬に、「青鈍「あをにび」の織物、いと心ばせあるを見つけ給ひて、御料にある梶子の御衣「ぞ」、聴色「ゆるしいろ」なる添へ給ひて」送った（玉鬘、一三〇頁）。4 婿の衣服などは、ふうう嫁の実家が用意する。少将が取り計らうのは、特別の配慮。5 前出「日次「ひついで」など見せて、御迎へ参らせむ」「五④の6」。6 匂宮も浮舟を急遽引き取るため、「わが御乳母の、遠き受領「ずらう」の妻「め」にて下「くだ」る家、下「しも」つ方にあるを、『いと忍びたる人、しばし隠いたらむ』と語らひ給ひ」用意させた（浮舟、一五四頁）。7 夕霧も落葉の宮を一条宮に移したとき、「壁代「かべしろ」、御屏風、御几帳、御座「おまし」など」まで用意した（夕霧、四四七頁）。当時の日用品については、『よしなしごと』（『堤中納言物語』所収）に列挙されている。8 光源氏が若紫を自邸の二条院に迎えたときも、人々は「誰ならむ。おぼろけにはあらじ」と、ささめく（若紫、三三二頁）。9 匂宮も両親に内緒で宇治の中の君と結婚する前から、夕霧の娘との縁談があり、宇治への通いを親に禁じられた（総角、二九二頁）。

①¹また、忍び^{忍音ノ方へ少将}やかにおはして見給ふに、また²このほどに光³さし添ひて珍⁴しきに、『あはれ、同じくは、⁵殿・上^{母上}の御心に違「たが」はぬことにて、心安くうちとけて、⁶殿へも渡^{少将ノ方へ}してみばや』とおぼすぞ、⁷せめてもの御志「こころざし」なる。

1頭注「またしのひやかに 按又の字衍字なるへし」。 2紫の上も「少しほど経て見奉るは、またこのほどにこそ匂ひ加はりたまひにけれ、と見えたまふ」(玉鬘、一一三頁)。 3少将も「光り輝き給ふ御さま」「一」で、夫婦ともに最高の美しさ。まさに理想のカップルであるがゆえに、仲を引き裂かれる悲劇は一段と哀れ深い。 4紫の上も「去年「ごぞ」より今年「ことし」はまさり、昨日「きのふ」より今日「けふ」は珍しく、常に目馴れぬさま」(若菜上、八二頁)。 5両親の許可を得ていないので、正式な結婚ではない。 6匂宮も、中の君を宇治から都へ移したと思います、母(明石の中宮)に二人の仲を認められ、二条院(匂宮の私邸)に迎えるようにという許可を得たが、正式な結婚ではないので、中の君は西の対に移された(総角、三三〇頁)。 7嵯峨野に置いたままでは、姫君が日陰者になる。

②尼上も、御調度「てうど」どもなど、元「もと」よりの²は昔²びたるもあれば、いと用意加へて待ち奉りつれば、⁴目安く御覧じわたす。かの御装束ども奉りて見給ふに、⁵なほ美⁷しと見給ひ聞こえ給へば、御車に乗り給ふ。尼君、⁸『此度「こたび」は、いかが』とためらひ給へども、「知らぬ所、頼りなくおはせむ」とて、そそのかし聞こえ給へば、⁹げに姫君の御事も心苦しくて出で給ふ。一両には殿と姫君、乗り給ふ。一両には、尼君・¹⁰少納言と言ふ若人「わかうど」の御乳母、乗りけり。¹¹おはし着きて見給ふに、所せき御用意どもの世¹²の常ならず、左中弁走り回るも、頼もしげ

なり。

1 当時も娘が結婚する際、道具類を一通り用意する。たとえば浮舟の異父妹のときも、「調度を設「まう」け」た（東屋、一四頁）。 2 参考「御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様「むかしやう」にてうるはしき」（蓬生、三一八頁）。 3 明石の姫君が入内するときも、「御調度どもも、もとあるよりも整へて」盛大に用意された（梅枝、四〇六頁）。また玉鬘の裳着「もぎ」の折も、光源氏が「その御設「まう」けの御調度の、こまかなる清らども加へさせ給ひ」（行幸、二八七頁）。 4 尼君の趣味の良さを窺わせる。浮舟の母は、常陸介との娘が結婚するので作らせた調度品のうち、「さまことにやうをかしう、蒔絵「まさゑ」・螺鈿「らでん」の細やかなる心ばへまさりて見ゆる物」は、浮舟のために取り隠し、「劣りのを、『これなむ良き』と夫（常陸介）に見せた（東屋、一五頁）。 5 光源氏も女性たちに、新調した正月用の晴れ着を配り、正月に見て回った（玉鬘・初音の巻）。 6 頭注「なほうつくしと按なほの詞俗意に用ゐたりいとゝなとあらまほし」。 7 頭注「うつくしと見給ひ 按見給ひのあひたにいざとなとの詞脱したるか」。 8 薫が宇治へ浮舟を連れ出したときも、弁の尼に同行を求めたところ、「こたみはえ参らじ」と一度は断られたが、薫が「『かしこも標「しるべ」なくては、たづきなき所を』と責めてのたまふ」ので、同車した（東屋、八六頁）。 9 頭注「とのとひめきみ 按少将とのと有し成へし」。今まで「殿」は内大臣の呼称であったが、ここは少将を指す。結婚して一家の主になったことを示すか。光源氏も「殿」と呼ばれるのは、葵の上が亡くなり二条院に戻ってから（賢木、一三〇・一三二頁）。 10 頭注「少納言 按少は中の誤にてさきに見えたる中納言の君也」。 11 参考「宵うち過ぎてぞ、おはし着きたる。見も知らぬさまに、目も輝くやうなる殿造り」（宇治から中の君が勾宮邸に到着した場面。早蕨、三五四頁）。 12 光源氏が夕顔を廃院に伴ったときも、「預かりいみじく経営「けいめい」し歩「あり」く」（夕顔、一三四頁）。